

ある町の教育について、当時の教育長さんが書かれた論文を読む機会があった。2003年、今から20年も前に発表された論文である。「教育改革」に関する内容である。論文を読んで悔しいことが一つ。勇気をもらったことが一つある▼何が悔しかったかといえ、20年たった今読み返しても「新鮮」だったことである。本来なら、われわれは20年分進んでいなければならないはずである▼なぜ勇気をもらったのかといえ、論文に書かれている内容は、現在阿下喜小学校の取り組みの指針となるからである。結局のところ、悔しくもうれしくも自分にとっては、「価値のある」論文であった。いなべ市が最上位目標に掲げている「子どもがArenityを発揮し、Well-being溢れる学校に」という教育理念にも通じる▼論文にもどる。論文中の言葉で、最も心動かされた言葉がある。「子どもたちの豊かな感性と知的好奇心に寄り添うこと」「先ず20坪の教室から、外へ出なければならない」▼今日は、いなべ市の事業「ふるさと応援隊」でJALの客室常務員2名の方をゲストティーチャーとして迎え、2年～4年生が豊かに学ぶ機会があった。いつもの20坪の教室が感性を育むフィールドとなった。授業を終えた2名の客室乗務員さんが、笑顔で、口をそろえて言った言葉がある。「とても楽しかったです。」子どもと共に学び合った授業者の至宝の一言である。